

Title	縄文文化の特質
Sub Title	Characteristics of the Jomon culture
Author	江坂, 輝彌(Esaka, Teruya)
Publisher	三田史学会
Publication year	1953
Jtitle	史学 Vol.26, No.3/4 (1953. 6) ,p.110(256)- 125(271)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19530600-0110">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19530600-0110</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 繩文文化の特質

江 坂 輝 彌

昭和年代に入つてから日本新石器時代文化の研究には驚くべき躍進があり、繩文文化の研究は關東地方を中心として山内清男氏などによつて非常に詳細な編年的研究が完成されつつあり、世界的に見ても非常に精細な研究がなされつつあるが、この研究に對し部外者が徒らに今日の常識的な見解から、つまらぬ憶測をなし、日本新石器時代文化に對する綿密な研究の一部に疑をさしはさむ者があり、これによつて初學者の研究態度を迷す如きがあつては甚だ遺憾であり、繩文文化の特質を記し、

誤てる常識的な見解を多少なりと是正していただくことができればと考へ、ここに敢て拙い筆を取つた次第である。

### 「繩文文化の起源」

日本の新石器時代文化、即ち繩文文化の起源は非常に古い時代に逆上り得るのであつて、エジプト、近東方面の文明發祥地の新石器時代文化の起源には、かなり遅くれるものではあるが、舊大陸各地域の新石器時代文化の起源には殆

ど遅れを取らぬ時代に、アジア大陸の各方面より數系統の新石器時代初頭の文化が傳播したものと推考され、又太平洋島嶼圏の文化が小島嶼を経て、思わぬところに極めて古い時代に傳播したのではないかと考へを抱をしむるものもある。

これらの新石器時代初頭の文化が、わが日本に傳播した頃は地質年代で云う第四紀の沖積世初頭の頃のことであり、第四紀にアジア大陸の環太平洋岸には陸地の隆起、沈降の週期的地殻運動が數度繰り返へされており、それに伴つて海進海退の現象も見られるところであり、沖積世初頭はこの海退、隆起の絶頂であり、わが日本はアジア大陸と陸続きになり、アジア大陸の東縁部をなしていた時代で、東支那海、黄海なども陸化しアジア大陸の東縁となり、日本海のみが大湖沼をなしていた時代である。

この時代には關東のローム層台地も高原をなし、エゾマツ、チョウセンマツ、イラモミなどが繁茂していた時代で、この時代の植物は化石となつて現在關東平野の谷奥の沖積低地の最下部に推積するコニファーンベットの最下底に埋没している。

恐らくアジア大陸又は東南アジアの島嶼圏などの新石器時代初頭の文化の日本渡來は、この絶頂期の直後、日本が大陸と斷絶する直前、或は直後の頃のことではないかと思われる。

又最近問題になつてゐる所謂『岩宿文化』前縄文文化は土器、石鏃、磨製石斧を保有せぬ、パーカーションとチョップによる打裂の整形技術のみより保有せぬ中石器乃至は後期舊石器に該當するかと思われる文化で、この文化はコニファーンベット堆積前の關東ローム層時代の文化であり、地質年代の上部洪積世に該當する時代である。

而して日本の新石器時代初頭の土器保有文化の石器製作技術の中にも、この岩宿文化の石器技術の傳統が残つてゐることは注目すべきであり、わが日本の新石器時代文化は、それ以前よりわが日本に土着の住民によつて大陸の新しい文化が受け入れられ、それを岩宿文化の中へ消化し、日本独自の新石器時代文化へと創造していつたのであり、各地で受け入れた數系統の異つた文化も、それらの文化の接觸點の南關東地方で融合され、新しい融合文化を作つたのが日本の新石器時代を代表する縄文文化であり、數系統の異つた文化の各々土器のその施文具、施文法を合せて用いて製作した土器が、世界の新石器時代の土器中最も秀れた作品であるとの定評ある縄文式土器なのである。

縄文文化、縄文式土器の生い立ちはこのように複雑な過程を踏んでいるのである。

廣義の縄文文化、日本最古の土器文化は、細い丸棒に撚糸をコイル狀に捲きつけたものを土器面に廻轉して押捺した撚糸の壓痕が器面に施文された砲彈形の尖底土器、又は撚糸自體を土器面に廻轉押捺して施文した斜縄文ある尖底土器であり、この土器を保有する文化は南關東附近を中心に分布してゐるようであり、東京灣口附近にはこれらの土器を出土する貝塚遺跡(い)もあり、この貝塚を調査するとこの時代の人々は既に潜水技術を心得ていたことも考へられ、又マガロサメ、イルカ、などの魚類、海棲哺乳動物などを多數捕獲してゐることよりして獨木舟などを操り、かなり沖に漁撈に出たことも考へられ、彼等が航海術もある程度心得た海洋民族であることも考へられ、この土器文化が、南關東地方を中心とする或る範圍を越えた本州各地には殆ど發見されぬ今日、この縄文を施文した、縄文式土器の源流とも云うべき、この文化が南關東の地に突發的に發生したとも考へられず、この文化の傳播系路に對し何か暗示的なものがあるようにも思われるが、本州各地、其他の地方の尙一層の精査を待つて最終的判斷を下したいものと考へる。

## 「本論」

このようにして成立した縄文文化は日本列島が大陸と隔絶した爲か、大陸方面よりの文化の傳播はしばらく途絶へた如くであり、西歴紀元前後に彌生文化が成立するまで、舊大陸の新石器時代文化に一般的である遊牧、農耕技術の傳播はあられなかつたわけであり、わが國の新石器時代文化は舊大陸の新石器時代初頭の文代内容そのままのものを、その當時の各々の器具自體に非常な改良を加へ、原始藝術の上から見ても非常に優れた作品を遺すに至つたのであるが、それ以外の新しいものへは大きな發展は無かつたのであり、わが日本の新石器時代文化は農業技術を持たぬ變則的な新石器時代文化であり、角田文衛氏は停滯文化の一例とされている。

日本に於ける新石器時代文化、縄文文化はこのように農耕のことを殆んど知らぬ變則的な文化である爲、狩獵・漁撈を主たる生業となし、これらの捕獲物が彼等の主食の大半をなすので、獸類、貝類、魚類、海獸類などの多く棲息する地方に彼等の住居は必然的に多くなり、全國的に見て、海岸地方であれば遠淺な海岸線の長い地方に魚貝類も多く、従つてこの地方に縄文文化の遺跡も比較的密集していることになり、又内陸部では森林、山岳地帯の奥深い獸類の多く棲む地方に遺跡も必然的に多くなるのは當然のことであり、山岳重疊する中部山岳以東の地方は近畿以西の地方より獸類も多く棲み、又この地方以東の地方の地域的特徴として暖系の動物群と寒系の動物群が混在しており、種類の多いことも又一特徴である。又關東以北のわが日本の太平洋岸は親潮と黒潮の兩者が混流する地域で、世界の三大漁場と云われるほど魚族の豊富であつたことも、縄文文化人がこの地域を安住の地となし得た大きな原因の一つである。

このように縄文文化は狩獵・漁撈が生活の中心であつた島、その對象となる獸類、魚族の多く棲む地域が人口密度が多

くなり、その地方が文化推進の中心地域となるのは當然であり、縄文文化繁榮の中心地域が奥羽、關東、中部の三地方であつたことは當然の現象として理解出来るのである。

これに反し、後續の彌生文化の中心生業は水稻農耕であり、原始農業の稚拙な農業技術を持つてしては、自然條件に制約されることが非常に多く、この文化が奥羽地方北半まで侵透することは非常な困難を伴い、ここに奥羽地方北半のみ見られ、續縄文文化<sup>4</sup>のような特殊な文化が発生するに至つたのであり、この彌生文化の中心は比較的水稻農耕の容易な、氣候溫暖な、そして平野地帯の多い西日本にその中心があつたことも、大陸との交渉もさることながら、この自然的條件からしての當然の歸結と考へられるのである。

次に縄文文化の時代のわが國內に於ける文化の傳播の速度の問題を検討してみよう。

古くは喜田貞吉博士などによつて縄文文化の終末期は西日本と東日本ではかなりの相違があるように考へられ、今日でもまだそのように理解する人も非常に多いようであるが、今日の縄文文化に對する精密な研究結果よりすると、實際にはそのようなことが絶對にあり得ぬことが判明し、北九州と奥羽地方北半との間に於ける縄文文化の終末、即ち純新石器時代文化より金屬文化への移行が北九州と本州北端部とでは、せいぜい數百年の差よりなかつたことが考へられるに至つたのである。

縄文文化の人々は或る狭い地域のみとの交渉に止らず、日本各地域にかなり廣範圍に交易圈を持つていたのであり、この廣範圍の地域を頻繁に往復していたことが考へられ、この交易圈は時によつてその地域に變化はあるが縄文文化早期初頭の時代から既にこのかなりの遠隔な地域との交易關係のあつたことの立證される資料があり、六、七千年或はその

れよりも數千年逆上ると考へられる古い時代に於て文化の傳播は既にかなりに早いものであつたことが考へられるのである。

又山間、僻地に於ては、他と隔絶しており、後世まで、その地方にのみ新石器時代文化が停滯するのではないかとの憶測をなす者もあるが、これは今日の社會機構の常識を持つて縄文文化時代の原始社會を律するからであつて、縄文文化時代の主要交通路が山岳地域の尾根道であることを知つたならば、この時代に山間僻地なる語の通用しないことを理解されるであらう。

縄文文化早期の土器にはアルカ屬の貝殻腹縁の壓痕を連續的に施文したものの、又同種の貝殻背で土器面を引搔いて施文した貝殻條痕文のあるものなどあるが、これらの文様あるものは岐阜、長野縣の山岳地域や福島縣會津盆地の諸遺跡などよりも多量に出土しており、これらのこわれ易い土器が海岸地方で作られ、山岳地方に運搬されたとは考へられず、又文様などこそ全く海岸地方のものと同じであつても、その土器の製作粘土は、その當時の各々の聚落附近で採集され、その各々の聚落で焼成されたものか、それらの土器を詳細に觀察すると海岸地方のもの山岳地方のものでは粘土質の異なることが明確に判斷されるところであり、故に土器は各々の地方で製作されたものと推察され、従つて海岸地方から山岳地方へ施文具である貝殻が貝類や魚類などの海幸と共に山岳地方へ運搬交易されたものと考へられ、山岳地方からは石器の石材、獸肉などが海岸地方へ送り出されたものと考へられる。

石器の石材などその聚落附近にある岩石を採集して使用したものではないかと考へられがちであるが、實際各遺跡出土の石器の石質を調べ、附近の礫層などと對比すると、その遺跡の石器に使われた石はその礫層には一個も發見されな

いような場合にも屢々ぶつかることがある。一例を記せば多摩段丘上にある北多摩郡拝島村林ノ上遺跡は縄文文化早期の遺跡であり、礫核石器の製作址も發掘され、多數の礫核石器が出土しているが、この礫核石器の石質は、この石器が裁斷具としての用途に耐へるように硬質な岩石が撰ばれ、閃綠岩などの火成岩中の半深成岩類の岩石が使われているが、この林の上遺跡段丘下の武藏野礫層に露出している川原石礫層や、第二段丘下の多摩川の河原にはこれらの半深成岩類の岩石は殆どなく、これらの石器の原石は丹澤山塊の岩石であり、相模川流域方面から運搬されて來たものであることが立證されるのである。

又關東地方の早期、前期の遺跡出土のチャート製の石鏃の原石は秩父乃至は八溝山塊の筑波山麓方面より運搬されたものと思われるが、チャート製の石鏃は房總半島の南端にまで發見されている。

千葉縣安房郡豐田村加茂遺跡<sup>(6)</sup>下層出土の諸磯式の石鏃がチャート製であり、これらの土器の文様は南關東の相模方面のものとは異り、茨城縣霞ヶ浦沿岸地方に廣く分布する、われわれが浮島式と呼ぶ諸磯式の一地方形式の土器と全くその施文法、文様が同一であることは、千葉縣南端の加茂遺跡もこの頃は、霞ヶ浦方面の文化圏にあつたことが立證され、従つて、このチャートも筑波方面からの交易品であることが考へられるのである。

然るに加茂遺跡の青粘土層上部の縄文文化中期の層からは移しい黒曜石の原石と、多數の黒曜石製の石鏃が出土している。そしてこの文化層出土の土器は南關東方面に分布圏を持つ阿玉台式の一地方形式と五領ヶ台式であり、五領ヶ台式は相模より靜岡縣富士山麓方面にまで分布圏を持つ文化であり、加茂遺跡出土の黒曜石は北伊豆方面原産のものであることが岩石學的鑑定によつても立證され、中期の文化圏、交易圏は前期と異つた方向に變つたことが判るのである。



この一例でも判るように一地域の文化圏と交易圏は密接な関係があり、このかなりの廣範圍の同一文化圏内では、かなり頻繁に交渉があり交易が行われていたものと考へる。

五領ヶ台式と殆ど變化のない類似文様をもつ文化は中部山岳地帯より、北陸方面にも及んでおり、この方面との交渉も考慮されるのである。

又縄文文化早期末或は前期初頭と考へられる木島式は南關東地方より静岡・山梨・長野・愛知・滋賀縣下にまでその分布圏を持ち、又僅かであるが富山縣方面にもその出土が認められ、富山縣下にはこの時期の遺跡の滑石製の珧狀耳飾、白玉などを多量に製作した製造址が発見されており、この遺跡で多量に発見された滑石製品と同一の滑石製品が静岡縣富士川河口に近い富士川町木島所在の木島式遺跡から數個出土していることは非常に興味深いことで、北陸方面原産の滑石製の裝身具は原産地附近で製作され、製品が各地へ運ばれたことを思わしめるものがある。又この地の滑石製品と思われるものは阿武隈川流域の宮城縣柴田郡槻木町上川名貝塚よりも出土しているが、上川名貝塚も亦木島式と略併行期と思われる地形式の土器を出土する遺跡である。

とにかく硬玉製品、滑石製品などはあまり各地に製造址が発見されておらず、これらの小形裝身具類は、それらの原石の産地附近で製品に作られて各地の物産と交易されたものと考へられ、これらの裝身具類は交易圏の研究上には興味ある資料となるように考へる。

又縄文文化早期の石山貝塚は滋賀縣琵琶湖の沿岸にある淡水産の貝塚であるが、貝塚の貝層中からは僅かながら海産の貝類、魚類が出土したように聞いている。又後期から晩期の遺物を多量に出土した奈良縣橿原神宮外苑の低濕地遺跡

よりは、タイ、スズキなどの魚類の骨がかなりの量発見されている。これと同様な例は北上川上流の岩手縣西磐井郡油島村附近の北上川沖積地の沼澤地沿岸にある後期晩期の淡水産の貝塚に見られることで、これらの貝塚からもハマグリ・カキの如き海産の貝類、マアジなどの海魚の骨が発掘されている。

縄文文化人は現在の山奥の僻村の人々以上に健脚であり、一日十數里の道を荷を負つて平氣で歩いたことであろうし、中には二十里近い道を飛ぶような速歩で歩いた原始人もあるように考へられ、大阪灣、伊勢灣沿岸などに住む縄文文化人が未明に捕つた魚類は、その日の夜遅くか翌朝までには樞原に運ばれたものと考へられる。又大船渡灣方面の岩手縣太平洋岸と北上川流域奥地でも同様なことが行われたと考へられるのである。又當時乾魚にしたり鹽漬にしたりして貯藏出来るようにして、海岸より奥深い山奥に運ぶことも考へ附いていたのではないかと思われる。海岸地方の貝塚の夥しい同種の二枚貝の殻を見ると、殆どのものが貝殻腹縁に破損のないものばかりで、これは貝類を熱湯の中に投げ入れて口を自然に開かせて身を取り出した爲めと考へられ、一度に多量に取り出した身は乾燥させるなどして貯藏の出来るようになし、これも海岸に住む人々の奥地への交易品の一つになつたのではないかと想像し得るものである。

日本國內に於て、一應北海道は除外して考へるとして、九州地方に彌生式文化が生成し、大陸より製鐵技術が傳播して、この製鐵技術が、又鐵製品が奥羽北端部まで波及するにはその間に僅か數世紀の隔りがあつた程度であり、縄文文化の終末も九州と奥羽北部で數百年の差よりなかつたことが今日の研究では立證されるのであり、これはわが日本列島は北海道の一部を除き大部分がわれ／＼日本人の祖先の原日本人、即ち日本石器時代人と云う同一人種のみ棲息地であり、従つて縄文文化時代の初頭頃より非常に廣範圍の交易が行われて居り、遠隔の地との交通も頻繁であり、従つ

て文化の傳播も非常に急速であつたと考へられるのである。即ち縄文文化末期の龜ヶ岡式土器の製作技術も何處の地にか師匠株の人が居て、全國から土器製作技術習得に其處へ徒弟に往き、技術を習得したものが又各地に弘めると云うような方法で、全く同一手法の文様器形のもが北は北海道南部から近畿地方の一部にまで及んだのではないかと考へられる。

しかし東南アジア山地の未開社會の人々やポリネシアの大きな島々の海濱と山地の人々は、臺灣の蕃地の人々が一地域、一地域、多少人種を異にし、言語、習俗を全く異にするため、周圍の異種族とは隔絶して殆ど交際をせぬと同様な現象が認められるのであり、従つて文化人に接することの少い山間の未開少數人種の間では何時までも古い習俗が續けられるのであつて、これはわが日本と大いに狀況を異にすることのように考へられる。

同一人種であり都會地の人々とかかりの交渉を持ち、現代はどのような山間僻地でも娘は洋装する時代になつても、片田舎にはまだくゞいろくゞな古い習俗が残つている。常に連絡のある日本のような社會でもこの状態である。文化の傳播は衣・食・調度などに早く、住宅・習俗などには遅いようである。

しかしこのことゝ現代のまだ未開社會にある少數人種への文化の傳播速度のことを混同してはならない。

記紀に現れる隼人・熊襲・蝦夷などと呼ばれた人々は人種學的に見て決して異種族ではない。現在これらの異種族視された人々の居住した地方の古人骨はかなりの數蒐集され骨格人類學的研究も進められている。しかし異種族と認められるものは全くない。これは結局大陸文化を高度に受け入れた大和朝廷の人々が、古い縄文文化時代の習俗を多く保持して來た片田舎の民衆を賤稱した名稱にすぎないと考へる。即ち漢學の影響による中華思想から大和朝廷を中心とする

知識階級が、大和朝廷を中心とする人々の優位性を誇示するためにこのような見方の史書の編纂を企畫したものでなからうか。

縄文文化末期の文化は奥羽より畿内の一部までが同一文化圏にあり、中部地方の伊勢灣沿岸附近より畿内を経て九州地方までが同一文化圏にある。即ち中部と近畿では二地區の地方文化が重複し、兩文化の併行關係が判るのである。

これによれば九州地方にも大洞C<sub>1</sub>式C<sub>2</sub>式該當の文化の存在が確認され、大洞A式併行の文化の存在と、立屋敷式との關連性などまだ幾多の疑問は存在するが、北九州の晩期の文化も除々に明らかになりつゝあり、強生式文化初頭との問題も近い將來には明らかになるものと思われる。

奥羽地方に於ても、北上川流域の盛岡附近までは大洞A式に彌生文化の影響が認められ、土器の割れ目修理の穿孔などに或は金屬器が使用されたのではないかと思われ、又大洞A式になると奥羽北端部の遺跡でも石器が激減しており、關東地方以西の地が鐵器文化の波及を見たこの時代には、僅かな量であつても鐵器が奥羽北端部にまで及んだものではないかと思われる。

又奥羽北部の地にも縄文文化終末期の大洞A式の後には、寒地のため農耕文化の傳播こそ認められぬが鐵器の傳播の考慮される大洞A式の新舊二形式が認められ、それに後續するものとして田舎館式、福浦島下層式、其他未命名の數形式など縄文文化の傳統の強い續縄文文化の數形式が續き、その後須惠器を伴出せぬ土師文化があり、その後土城址などを残した土師器と須惠器を伴出する、器形により數形式に區分出來る文化があり、續縄文文化以後のこれらの文化が奥羽地方の北部の奈良朝から平安、鎌倉時代を埋める文化であり、縄文文化の終末期から續縄文式文化の數形式が彌

生文化より古墳時代文化に併行するものと考へられる。

而して喜田博士が問題にされた宋錢はわれわれの下北半島の調査で、加藤孝氏などによつて圖らずも土師器、須惠器擦文土器片などを出土するこの文化の最末期の貝塚の貝層上部で發掘され、<sup>10)</sup>又昨年鈴木尙博士により下北半島泊の洞窟墳墓からはこの時代の人骨と共に明錢が出土し、<sup>11)</sup>これらにより土師器、須惠器使用の終末が、わが國へ宋錢明錢が盛んに輸入された室町時代以降、安土桃山時代頃になるのではないかと推定されるに至つた。

又江戸時代のものについては、八戸附近の古寺の瓦竈出土の日常雜器があり、これによつて如何なるものであつたかが理解される。

又下北半島津輕海峽沿岸には各所に砂鐵の露頭があり、この地方には土師器を出土する製鐵所址が道路工事などによつて各地に發見され、ふいごの口もかなり出土している。

若し喜田博士の考へられるように奈良、或は平安末までも繩文文化が奥羽北部の僻地に蝦夷によつて續けられ、石器が使用されていたと考へるならば、山間避地にある大洞、A式以降の鐵器を保有したと考へる數形式の續繩文文化の存在が無視されることになるのである。大洞A式以前の土器片を出土する畑には石鏃などの剝片石器の石屑が無數に散亂しているが、A式後半形式と思はれる土器片より以降の續繩文式の土器片を出土する遺跡からは石鏃などの剝片石器も極めて稀に發見されるか、全く皆無であり、石屑も殆ど散つていないのであつて、このことによつても石器に代るものの出現を思はしめるものがあるのである。大洞、A式以降の土器片を出土する洞窟か貝塚遺跡を發掘し、骨角器を發見すれば、直接鐵器が出土しなくても、その骨角器が石器で作られたものか、鐵器で作られたものかは、その面を見れば

ば一見判然とするので、今後のこの種の貝塚或は洞窟遺跡の調査が行われれば、續縄文文化に於ける鐵器の存在も明確になつてくるものと考へられるのである。

以上に記したことによつても、その大略を理解されたことと考へるが、縄文文化は階級差のない同一原始民族によつて發展し、新しい高度の文化の海外よりの傳播により、縄文文化を基調として新文化へと飛躍的發展をなし消滅した文化であつて、次期彌生文化の生成は地方によつて、大陸に接する地方より、遠隔の地方ほど、前文化の傳統が強く残つた點はあるとしても、この文化傳播は急速なものであり、九州と奥羽とでも數百年の差があつたかどうか疑わしい程である。

或る人は原史時代の貴族社會が高度の文化を持つに對し、一般民衆の文化は低文化に止つたことを指摘し、文化の流れは一樣には考へられない、山間僻地には後代まで石器文化が残ることがあると考へられたようであるが、古墳時代の農民は低度の生活をなし、縄文文化時代そのままの竪穴住居に住つたとは云へ、住宅の調度、構造は大いに進歩し、竈なども築かれ、日常利器、農具は鐵器を使用するようになってゐる。ただ華美な裝身具、調度を持たなかつただけである。これは階級差貧富の差によるものである。日本の古墳時代の文化を貴族豪族を中心とした文化と考へ古墳出土の多く優れた遺物は或る特定の人々のみ使用したものであつて、一般民衆に關係ないものとし、これをアジア各地の古代の都市國家と周邊未開地の生活との關係と類似のものとして考へることは、都市國家は或る特權階級の富によつて作られた、同一氏族の小集團とも見ることが出來、妥當と思われるが、これを貧富の差、階級差の發生前の日本の縄文文化の時代について考へることは無謀と云うべきではないだろうか。

## 「結語」

以上縄文文化について、私の思つたままを書きつらねてみたのであるが、まだ本稿に於て記し得なかつたことも多く、縄文文化の特質全般について論じ得なかつたことを甚だ遺憾とする。

縄文文化は沖積世初頭以來、紀元前一・二世紀の頃まで非常に永い年代、わが日本に榮えた變則的な新石器時代文化であるが、この永い年代中には同じ縄文文化の中にも非常に飛躍的發展をなした時期もあり、これが如何なる理由に起因するものかなど、まだ解明されぬ點も甚だ多く、又この前期より中期への躍進時代以降に石棒だとか、石造遺構だとかが見られ、文化内容も非常に複雑になり、前期までの文化との間とはかなり相違があるように思われるが、今日の研究ではまだ物質文化の上の相違が判る程度で、詳細が判らぬことは實に遺憾とするところである。又早期より前期へ、前期より中期へと狩獵術、漁撈術も次第に進歩し、個人的なるものから、集團的なものへと遷移し、食料獲得の技術の進歩に伴ひ、食生活も安定し、次第に定住的になり、聚落の規模も大きくなり、中期には涌泉のある河成段丘上の低平な臺地面に涌泉周圍聚落とも云うべき大聚落を營むことが多くなる。このような場合、その聚落の最も經驗に富む老人などが狩獵、漁撈の指揮者になり、獲物の分配なども行つたと考へられ、このような老人が次第に村長むらおぢ的性格を持ち、又聚落と聚落の交易關係もその範圍が次第に擴大し、文化的にも、非常に廣範圍が同一文化圏となり、本州を中心とする日本全域が大略文化的には統一のなつたのもこの頃からであつたと思われる。又この中期の飛躍的發展を或種の農耕が開始されたと考へる學者もあるが、未だその積極的な證左はなく、このことは今後の研究に待つて發表すべきことと考へる。

以上縄文文化の特質について完全に論及し得なかつた點もあるが、本稿に於て特に強調したかつた點は、縄文文化は所謂岩宿文化を基調として、新石器文化渡來以前にわが日本に居住した、われわれ日本人の遠い祖先である原日本人によつて日本周邊の各地より渡來した新石器時代文化、即ち土器文化を消化し渾然一體の土器文化をなしたものであつて、その發生過程は甚だ複雑多岐なものと云わなければならぬ。しかしこの縄文文化は細長い日本列島内に居住した同一人種によつて生成されたものであり、日本列島内に於ける文化の傳播は非常に急速的であり、彌生文化への移行も極めて急速的であつたが、極めて原始的な農業技術より持たなかつた、この時代の水稻農耕技術を以てしては、その農業文化は北上平野以北への侵透は困難であり、奥羽北部へは、その鐵器文化のみが急速に傳播し、變速的な續縄文文化を生成するに至つたことである。

註(1)

縄文文化早期前年にはまだ海浸が進歩して居らず、純鹹貝塚は南關東地方では横須賀附近の東京灣口などに限られ、利根川沿岸の佐原町附近から布佐町附近までにある、早期の三貝塚は淡鹹乃至は主淡貝塚である。

(2) 横須賀市追濱夏島貝塚、などからイワガキなど干潮時に水深四、五米の海底に棲むカキ類が多量に發掘されており、これらは潜水して捕獲したものと考へられる。

(3) 角田文衛、古代史通論、第二章 19、一八四頁、一九五〇年十月、三明社發行

(4) 續縄文文化、一部の人々は斜縄文の施文された縄文文化の傳統の強い、農耕具としての石器などを保有する水稻栽培を行つた痕跡のある彌生文化(杉原莊介氏の云う接觸文化)を誤認して續縄文文化と呼んでいるがこの名稱をつくられた山内清男氏の續縄文文化とは、奥羽北半以北の農業文化を伴はぬ、従つて彌生文化の特徴を示す農具としての磨製石器を伴はぬ縄文文化以後(晩期大洞、A式以後)の縄文文化の傳統を引く、狩獵漁撈を生業とする文化を云う。

(5) 縄文文化の遺跡は早期前期の時代のものに、ことに多く高地性の遺跡がある、一千米以上の山脈の尾根近くに涌泉があれば



その附近にかならず縄文文化の遺跡があると考へて良い、乗鞍岳の鈴蘭小屋附近にも早期の遺跡があり、菅平、霧ヶ峰などにも早期、前期の遺跡が知られている。

(6) 藤田亮策  
松本信廣  
清水潤三  
江坂輝彌

加茂遺蹟

昭和二十七年三月

三田史學會

(7) 三角寛氏が日本人類學會例會での講話によると日本の山窩は、關東より畿内までを數日で、山を飛ぶようにして歩くのとであつた。

(8) 文化の受け入れは、非常に早いものと遅いものがある、現代を見ても、それは理解出來ると考へる。即ち服装、裝身具、調度言語などには新しい歐米のものが非常に多く取り入れられている、今日如何なる山間部に入つても、子供は洋装をしないものは殆ど稀である、しかし住宅を總て洋式にする人は殆どない、農家などは古來そのままのものが非常に多い。

(9) 最近、青森縣八戸市、下北半島などで近世のアイヌ人の骨格が、かなりに發掘されているが、これは近世になり北海道から逆に本州へ渡來したものと考へられるものである。

(10) 青森縣下北郡東通村尻屋ムシリ遺跡の昭和二六年度の筆者を中心とする發掘調査にて發見、加藤孝氏、吉田格氏など參加、大觀通寶一枚出土

(11) 永樂通寶數枚が出土した。

あとがき わが日本へ大陸より波及した諸文化は、この文化が原日本人に受け入れられた場合、その文化の持つ意義が本來のものと全く變つてしまう場合がある。このような文化の傳播、移動による變化、即ち古代日本に於ける大陸文化の受け入れかたなどに關する考察については稿を改めて詳述したい。